

ダビデ王物語講解説教
聖書：サムエル記上 16章 1-13節
『神の選び』

今日からダビデ王物語にご一緒に聞いて、神さまを礼拝してまいります。
ダビデ王物語というのは、旧約聖書のサムエル記の上と下、列王記にまたがって記されているダビデという人物の物語です。物語というのは、作り話、という意味ではなく、福音書がイエスの物語である、というような意味で、一人の人物の歩みを散文で書いたもの、と受け取ってください。ダビデという人物がどれほど興味深く、関心を引く人物か、ということ、またイスラエルの歴史においてどれほど大きな働きをした人か、は読んでいけばわかるのですが、そもそもこのダビデ王物語というのが物語として抜群におもしろい。
今朝は、ダビデが初めて登場するサムエル記上 16章の最初の部分を読みました。

ダビデが登場するにあたっては、前史というか、それ以前の話があって、それがサムエル記上の 1章から描かれています。今回わたしも説教の準備のため、1章からあらためて読んだのですが、これがとにかく面白い。ワクワクするような小説を読むように引き込まれていく。

ダビデ登場までの主たる登場人物はサムエルとサウルの二人です。サムエルは預言者。イスラエルは周囲の国がみんな王さまを立てて、王制をひいている時にも、あえて王を立てませんでした。それは神のみ言葉に聞いて歩むという歴史を持った民だったからです。人間の王を立てず、12あった部族が集まり、12部族連合として、その都度神の言葉に聞きつつ歩んできたのです。そのためにもイスラエルには預言者たちが存在し、この預言者を通して民は神の言葉に聞いて、歩んできたのです。ところが、人々は神の言葉に聞くこと以上に、政治的、軍事的な王を求めるようになっていく。周囲の国はすべて王制を引き、王さまの命令ひとつで、政治的な判断をなし、軍隊も動かす。それに比べて、イスラエルにはほかの国のような軍隊もなく、王さまの命令ひとつで動く他の国とは違い、トップダウン方式でもなく、戦争が繰り返されるこの時代にあっては、他国よりも軍事的には弱い国、弱小な国でした。イスラエルの人々の中にも王様を立てたい、という人が次第に多くなってきました。しかし預言者サムエルはそれに対しては反対でした。王を立てることで、人々は神の言葉に聞き従うよりも、人間である王に従うようになり、それは神により頼んで歩む道から離反していくとサムエルは思ったからです。ところが、サムエルが聞いた神の言葉は「民の言うことを受け入

れよ、彼らはわたしが王として彼らを治めることを拒んだのだから。」というものでした。

サムエルはこの神の言葉に違和感を覚えたのではないかとわたしは想像します。なぜ神さまはこんなことを言われるのか。民の言葉など受けいれず、逆に、神を王とせず人間の王を立てようとするイスラエルの民を罰すればいいのに。そう思ったのではないか。イスラエルはあくまでも王を立てずに政治（まつりごと）をおこなえばいいではないか。サムエルはその思いを棄てることはなかった。しかしサムエルは神の言葉に従います。そうして神が選ばれた王がサウルなのです。サウルこそがイスラエルという国家の最初の王さまです。

そのサウルが王として選ばれ、王として歩いていく中で、神さまの言葉を聞かず、自分の思う仕方で事を進めていくということが起こる。それで、神さまがサウルを王として選んだことを悔いる、ということが今日読んだ16章の直前15章に出てきます。これは旧約聖書の中でもとても有名な箇所です。神さまが選んだことを悔いるのですから。そして、サウルが神の言葉を退けたから、神はサウルを王位から退ける、と言われた。サウルは自分の罪を見逃してくれ、とサムエルに頼むのですが、サムエルは神の意志はあなたを王位から退けることだ、と言って動じない。まだ1章から読んでいない方は、ぜひ読んでください。そしてこの神とサムエルとサウルとの三者の織り成すドラマを読んでいろいろなことを感じてほしい。わたしは以前読んだときと、サウルに対するの印象がずいぶん違っているのに、我ながら驚きました。サウルが王位から退けられる、それはサウルが神の言葉に聞き従わなかったからだという。だがそもそも選んだのは神さまではないのか。ならばサウルがどの程度の間人か知っておられたはず。知っていてなぜ選び、なぜその選びを悔いたのか。サウルは哀れではないか、という気持ちを持ったのです。

いずれにせよ、サウルを退けるということで、新しい王の選びに、入ることになり、それで選ばれたのがダビデだったので。

ダビデが選ばれるいきさつが16章には書かれています。「あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべきものを見出した。」と主は言われる。神さまはあらかじめ、エッサイの息子の中から一人の人物を選んでおられた、ということです。サムエルは複雑な気持ちを持っていたと思います。16章の1節で神はサムエルに「いつまであなたはサウルのことを嘆くのか。」と言っています。サムエルはサウルが王位から退けられることを単純に嘆いているのではないのです。神がご自分でなされた選びを悔いた、と言って、サウルを退け、新しい選びをす

ることに複雑な思いを持たざるを得ない。なぜなら、サウルが神の言葉から離反したように、次に選ばれたものも、神の言葉に聞き従い続けていく、という保証はどこにもない。実際、サウルも自分が権力を握り、国家のトップに立ったことで、権力者になったことで、変化していったのです。神の言葉ではなく、自分の思いのままにという欲望が出てきたのです。サムエルはそもそも王さまというものを置くことそのものが悪だと思っていた。だが神はまた選ぶという。結果そこでまた悔いることになるのではないか。サムエルの思いは複雑。だがサムエルは神の言葉に従う。すこしだけ脇道にそれますが、このダビデ王物語を読みながら、なぜダビデのことでこれほど埋め尽くされているのに、サムエル記と呼ぶのか、ぜひゆっくり考えていただきたいと思います。それはとても大事なことだろうと思います。

サムエルはベツレヘムに着くとエッサイとその息子たちを会食に招く。エッサイには八人の息子がいたようですが、おそらくは兄弟の中で年長の者からサムエルの前に姿を現したでしょう。最初にエリアブがやってくる。サムエルはこの人ではないか、と心のうちで思ったが、主の声が聞こえ、彼の容貌や背の高さを見てはいけぬ。わたしは彼を退ける。神の見る場所は、人の見る場所とは異なるのだ。人は目に映るところを見るが、わたしは心を見る。」と言われるのです。これはあまりよくわかる言葉ではない。確かに人間は目に見えたもので判断してしまうことも多い。だがそればかりではない。人間も人を判断するとき、容貌だけで決めるわけではない。その人の心も見ようとするのではないか。だが、ここで言われている神は心を見る、というのは、その人が善良な人か、心根の優しい人か、というようことではないのではないか。

神が心を見るという場合、神への心の向き方を見るということでしょう。神に真摯に向き合い、謙って生きていこうとしているのか、その心を見る、と言われていのでしょうか。そしてそのうえでとても重要なことなのですが、その神が見る人間の心というのは、わたしたちにはわからないのです。人が見るようには見ない、ということは、人間とは違うところを見ている、という意味と、人には見えない、人にはわからないものを神は見えておられる、という意味が込められています。つまり、神への人間の心というのは、わたしたちにはわからないということです。ただ神が見てくださる、ということです。

エッサイは七人の息子をサムエルの前に進ませましたが、その中には神が王として選ばれるものはいなかった。サムエルは「子供たちはこれで全部か」と尋ねます。するとエッサイは「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」と答えました。サムエルはその子を連れてきなさい、と言う。連れてこられたのがダビデだったのです。いったい彼はこのときいくつだっ

たのか、わかりませんがおそらくは十代の少年から青年になりかけの年代だったのではないか。彼は血色もよく、目が美しく、姿も立派だった、というのですから。つまりダビデは外見もよかったということです。そしてそれはサウルも同じ。彼ほどイスラエルで美しい人はいなかった、とまで言われていたのです。すると主はサムエルに「さあ、彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」と言われた。油を注ぐ、というのは王の即位の際に行うことです。つまりこの者こそ、わたしが王として選んだものだ、と言われたということです。なぜ神がダビデを選ばれたのか、それはわたしたちにはわかりません。単純に信仰的だとか、人間的に立派、などと括れるようなものではありません。ダビデがどんな人物だったのか、これからわたしたちは見ていくわけですが、見れば見るほど、神がなぜ選ばれたのか、わたしにはわからない、という他ないのです。わたしたち一人一人も、王としては選ばれてはいませんが、神の選びを受けて、活かされているのです。神の器として、皆さんも神に選ばれている。なぜ自分のような者がとというのは、必ずあるのです。信仰的でも立派でもないわたしがなぜ神の僕として選ばれたのか、わからない。しかし神のご意思がそこにある、ということはこのダビデの選びの物語が語っているのです。わたしたちはそのことを本当に一人一人謙遜に受けとめる必要があるのです。

そしてもう一つ。神さまはサウルを王として選んだことを悔いたのに、もう一度新たに選びをなされ、王を立てられた。神が悔いた、ということはどういうことなのか、この物語全体を通して受け取っていきたいことですが、今ここで言えることは神は人間の罪に痛みを覚えておられた。民の誰よりも神の言葉に聞いて歩むことを望んだサウルが神の言葉から逸れていくことを神は痛んでおられた。しかし尚選ばれたということは、人間なんてもうダメ、というのではなく、忍耐して人間と共に歩む道を神は歩んでいかれる、そのことが最もあらわになるのはイエス・キリストなのですが、神のダビデの選びは、そのことを指し示すものなのです。